

特色あるフロンティアスクールの取組事例

都道府県番号	33
都道府県名	岡山県

()

・学校名及び規模

笠岡市立笠岡小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員	
学級数	2	2	3	2	2	2	2	15		
児童数	62	73	87	66	66	72	3	429	23	

・実践研究の概要

<p>・主題 確かな学力の向上を目指す指導の研究 ー基礎・基本の定着と個に応じた指導を通してー</p> <p>・テーマ設定の趣旨 本校児童は、全体的に明るく素直で、指示されたことにはまじめに取り組むことができるが、学習意欲や態度の面で個人差が大きく、自分なりの解決や表現ができないことが少なくない。また、自ら学ぼうとしたり、自主的に考えて行動したりすることが少なく、受け身的な学習になりがちな児童も多い。こうした現状を踏まえると、これからの本校の教育にあっては、知識・技能はもちろん重要であるがそれだけでなく、学ぶ意欲や思考力、表現力まで含めて学力と捉え、そうした学力を子ども達にはぐくむことが重要な課題であると考え。そこで、本校では、子ども達が学ぶべき内容を厳選し、個別指導やグループ別指導、T・T指導、理解や習熟の程度に応じた指導など、個に応じたきめ細かな指導を行うことにより、基礎・基本を確実に定着させるとともに、子ども達の学ぶ意欲を喚起し、確かな学力の向上に努めたいと考える。</p>
--

・実践研究の内容について

() 研究体制の工夫

- T・T指導並びに少人数指導体制の確保
障害児教育担当、算数T・T担当、児童生徒支援担当の3名の教諭が、低学年、中学年、高学年の算数科の授業に入り、担任と協力してT・T並びに少人数指導を行う。
- < 1・2学年 >
 - ・同一学級内で、少人数の学習集団をつくらず、複数教師による指導や個別指導を行う。
- < 3学年 >
 - ・同一学級内で、複数の教師が協力し、学習内容や習熟度等に応じた学習集団をつくり、指導を行う。
- < 4・5・6学年 >
 - ・学級の枠を超えて少人数のグループを編成し、指導計画に基づいた習熟度別指導を行う。
- 習熟度別指導の充実
児童の理解や習熟の状況等に応じて、指導内容を適宜工夫する。
- A) 補充的な学習
児童が基礎・基本を確実に身に付けるために、個々の学習状況に応じて補充的な学習ができるように指導内容を工夫する。そのねらいから、ア)数量や図形についての意味の理解、イ)数量や図形についての技能の習熟、ウ)数学的な考え方の定着などの3タイプが考えられる。
- B) 発展的な学習
基礎・基本を身に付けている児童には、より進んだ内容などの発展的な学習ができるように指導内容を工夫する。その基本的な学習として、ア)基礎・基本の上に新たなものを作り上げる学習、イ)基礎・基本を活用して問題を解決する学習の2タイプが考えられる。

() 実践研究の内容

- 第1学年算数「たしざん(2)」(学級担任+障害児教育担当教諭)
 - ・本単元では、今後の加法や減法の計算の基礎となる繰り上がりのあるたし算の習熟に重点を置いて指導した。1次の問題解決の過程では、数学的な考え方を定着させるために、児童が自分なりに考える時間を確保し、具体的な操作活動を通して自ら計算方法を見つけだせるようにした。そして、2次では、個々の考え方や習熟の度合いに応じて練習方法が選択できるように学習過程を工夫するとともに、個に応じた支援ができるようにT・T指導を取り入れ、繰り上がりのあるたし算が確実に身につくようにした。
- 第2学年算数「九九のひょう」(学級担任+障害児教育担当教諭)
 - ・本単元では、児童のつまずきに対応することができるようT・T指導を取り入れた。一斉指導の中では十分に問題把握ができない児童に対して、早い段階で支援することができ、児童に「よし、やれるぞ。」という解決への見通しをもたせることができた。このことは、自力で解決しようという意欲を喚起し、その後の児童の自発的な学習につながった。
- 第3学年算数「重さくらべ」(学級担任+算数T・T担当教諭)
 - ・本単元ではT・T指導を取り入れ、授業形態を次のように工夫した。授業の前半は、一斉に同じ課題に取り組んだ。後半は、習熟をはかるコーナーと、発展的な課題に取り組むコーナーを設定し、「できるかなチェック」の結果や教師のアドバイスをもとに、自分に適したコーナーを選んで学習に取り組んだ。その結果、児童自身が自らの習熟度を自覚し、その後の学習を選択することが可能になり、学習する楽しさを味わうことができた。また、教師が、個々のつまずきに応じた支援を行うことが容易になったことで、児童に「分かった」「でき

た」といった満足感を与えることができた。

- 第4学年算数「わり算(2)」(学年合同・学級担任+算数T・T担当教諭+教務担当教諭)
- ・暗算を学習する2時までにはクラス別でT・Tによる指導を行ったが、筆算の学習に入る4時から抵抗が大きくなると考えたので、コース別授業を展開した。このコースは、児童の習熟度に合わせ、ホップコース(基礎・補充)、ステップコース(標準)、ジャンプコース(応用・発展)という3コースとした。その方法として、学級を解体し、3コースそれぞれの授業を4人で担当したが、ホップコースは個別指導を要する児童が多いため、T・Tで進めた。学習コースの選択は、3時に振り返りチェックを行った後、児童自身に選択させたが、不適切な場合は、助言をして変更を勧めた。原則として3コースの学習の進度をそろえた。
 - ・この習熟度によるコース別学習により、個に応じた指導が容易になった。児童にとっても、自分に合った学習内容を自分にあった進度で学習することができ、基礎・基本を確実に身につけることができた。ホップコースの児童は「分かった」という喜びを、ステップコースの児童は活躍できた喜びを、ジャンプコースの児童は発展的な問題にチャレンジできた楽しさを体感することができた。

第5学年算数「面積」(学年合同・学級担任+児童生徒支援担当教諭)

- ・本単元では、全体を通して習熟度別の学習形態をとった。コース選択の目安、学習内容、単元計画は以下の通りとした。

	ちしゃコース(補充)	けやきコース(補充・発展)	いちょうコース(発展)
コース選択の目安	<ul style="list-style-type: none"> ・面積の意味理解が不十分 ・既習の面積が求められない ・復習から始めることが望ましい ・児童がこのコースを希望している 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習の面積はほぼ求められる ・教科書の内容程度までの学習を希望している 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習内容が身に付いている ・多様な考え方が得意である ・発展的な内容の学習を希望している
学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・広さの意味、表し方の復習 ・平行四辺形の面積 ・三角形の面積 	<ul style="list-style-type: none"> ・三角形の面積 ・一般四角形の面積 ・平行四辺形の面積 	<ul style="list-style-type: none"> ・三角形の面積 ・一般四角形の面積 ・平行四辺形の面積 ・台形の面積 ・ひし形の面積
単元構成	<ul style="list-style-type: none"> 復習 平行四辺形 三角形 	<ul style="list-style-type: none"> 三角形 一般四角形 平行四辺形 	<ul style="list-style-type: none"> 三角形 一般四角形 平行四辺形 台形・ひし形

- ・単元構成については、「ちしゃコース」は、等積変形や倍積変形のしやすい平行四辺形から導入した。「けやきコース」「いちょうコース」は、教科書の学び方(三角形の面積が基本であり、三角形の面積が分かれば、あらゆる多角形の面積を求めることができる)を尊重し、三角形から導入した。いずれのコースも、変形や分割などの算数的活動を十分行いながら指導した。特に「ちしゃコース」「けやきコース」は、マス目のあるワークシートや実際に操作できる図形を用意し、児童の具体的な思考となるように支援した。また、図形のまとまりごとに、学習への意欲、考え方、理解度について自己評価を行った。それをもとに、励ましや質問への回答、考え方の補説などを行い、個々のつまずきに対する支援を行った。

第6学年算数「計算のまとめ」(学年合同・学級担任+児童生徒支援担当教諭)

- ・本単元では、事前調査の結果をもとに、習熟度にあまり差のない整数のわり算と小数のたし算、ひき算については各学級で復習を行い、習熟度に差の大きい小数、分数の復習場面でコース別の学習形態を取った。習熟度別コース学習では、学年全体を3コースに分け、3人の教師で指導に当たった。コース選択の目安、学習内容、単元計画は以下の通りとした。
- ・整数のわり算と小数のたし算、ひき算を各クラスで復習した後、コース選定のための振り返りチェックを行った。それをもとに、児童は学びたいコースを自分自身で選択した。

	ちしゃコース(補充)	けやきコース(補充・発展)	いちょうコース(発展)
コース選択の目安	<ul style="list-style-type: none"> ・小数のかけ算、わり算の筆算で、小数点の移動が不十分 ・分数のたし算、ひき算で、通分が不十分 ・復習から始めることが望ましい ・児童が希望している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小数、分数の四則計算がほぼできる。 ・確実な定着が望まれる。 ・児童が希望している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小数、分数の四則計算が確実にできる。 ・発展的な内容の学習を希望している。
学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・小数のかけ算 ・小数のわり算 ・分数の四則計算 	<ul style="list-style-type: none"> ・小数のかけ算 ・小数のわり算 ・分数の四則計算 ・発展問題 	<ul style="list-style-type: none"> ・小数のかけ算 ・小数のわり算 ・分数の四則計算 ・発展問題

単元構成	整数のわり算		
	小数のたし算，ひき算		
	振り返りチェック・コース選定		
	小数のかけ算 小数÷整数 小数÷小数 通分 分数のたし算，ひき算 分数のかけ算，わり算	小数のかけ算 小数のわり算 分数のたし算，ひき算 分数のかけ算，わり算 計算のまとめ 応用問題 ・小数，分数の混合計算	小数のかけ算，わり算 分数の四則計算 発展問題 ・混合計算 ・応用問題 ・応用問題 ・応用問題

- ・「ちしゃコース」は、「小数のかけ算，わり算，分数の計算の意味や解法が十分に理解できず，個別の指導や補充的な学習を必要とするコース」で，小数のかけ算，わり算，分数のたし算，ひき算，かけ算，わり算を時間を十分取って指導した。「けやきコース」は、「小数のかけ算，わり算，分数の計算の意味や解法は理解しているものの誤答があり，補充的な学習も必要とするコース」で，小数，分数の計算を既習の順に繰り返し復習し，応用問題にも取り組んだ。「いちようコース」は、「小数や分数の計算の意味や解法が分かり発展的な問題に挑戦するコース」で，小数のかけ算，わり算，分数の四則計算の意味や解法を確認した上で，小数，分数の混合計算や加減乗除が一つの式にある問題など，難易度の高い発展的な問題を学習した。
- ・補充的な学習のねらいは，算数の基礎・基本を身につけるようにすることにある。児童が基礎的・基本的な内容にじっくりと時間をかけて学習できるように，「ちしゃコース」では現行の4年生・5年生・6年生の教科書をもとにして問題を作成し，教師による個別指導を中心に，既習の内容をていねいに復習した。
- ・補充的な学習の一つとして，繰り返し学習があげられる。「けやきコース」では，繰り返し学習による補充にも取り組んだ。「ちしゃコース」と同じように現行の4年生・5年生・6年生の教科書をもとに問題を作成し，必要に応じて繰り返し学習した。また，グループ学習，問題作りなどの活動も取り入れ，計算の仕方の確実な定着を図ることができるようにした。
- ・「いちようコース」は，発展的な学習に取り組んだ。発展的な学習は，児童がそれまでに身につけてきた基礎的・基本的な内容をもとにして，より広げたり深めたり進めたりする学習である。そのために，昨年度までの4年生・5年生・6年生の教科書を参考にして，整数，小数と分数の混合計算など，学習指導要領に示されていない内容や現行の教科書には掲載されていない問題に挑戦した。また，学習中に自分の考えを出し合うダイアログ学習を活用し，自分の考えをより深めたり，友達の考えのよさにふれたりする場も設定した。
- ・いずれのコースも1単位時間ごとに，学習への意欲，考え方，理解度について児童自身が自己評価活動を行った。教師による計画的な評価活動と児童の自己評価や学習感想をもとに，励ましや質問への回答，考え方の補説などを行い，個別につまずきへの支援を行った。

() 成果と課題

1・2年の算数科では，1時間ごとの評価活動の結果を基に役割分担を明確にしたT・T指導を行うことにより，個に応じた適切な指導ができ，基礎・基本の習得を図ることができた。

3・4・5・6年の算数科での少人数指導では，習熟度別学習を取り入れ，児童自身によるコース選択を可能にしたことにより，自ら学ぶ意欲や主体性を向上させるとともに，学習内容の定着を図ることができたと考える。

授業45分の最小の単位時間を15分＝1モジュールとして編成したが，モジュール化したことで，5・6年の算数科での少人数指導では，指導内容によって60分（4モジュール），75分（5モジュール）など，一単位時間の弾力的運用が効果的であった。

コース別学習の場合，コースごとの教材研究，学習内容，学習進度，評価等の打ち合わせに相当の時間が必要となる。そのための計画的・組織的な時間調整が大切であると考え。

少人数指導の習熟度別学習の場合，保護者や児童の間に劣等感や差別意識をもたさないような十分な配慮が必要である。

評価では，教師による評価と児童による自己評価を意図的・計画的に進めたが，一人一人の児童の学習状況の把握はまだ不十分である。今後も児童の学びの姿を見取るためにより一層の評価の工夫が必要だと考える。

() 成果の普及方策

平成14年度は，研究紀要を作成し，市内各学校に配布予定。
 平成15年度は，授業研究会と研究紀要の作成と配布予定。
 平成16年度は，研究成果発表会（11月）を予定。